



## 婦人と子ども

### 第六卷第十壹號

#### 幼児教育と自然主義

亞米利加には時々突飛な事を造るものが出るので頗る評判であるが、是も其一つて近頃ゲー、エフ、シャープと云ふ人は頗りに裸体主義とか云ふことを主張して居るをなだ、そして、其云ひ草は斯うである。一人人間が衣服を着るのは天賦の性質を損ふもので虎列剌、質扶斯、肺結核等一切の病氣は此天賦の性に悖る爲めに起る所の天罰であるとそこで、自らは裸体の儘で信徒を募つて居ると云ふことだ。ものも斯ふ烈しくなると馬鹿けた所は誰にも直に氣が着くけれど尤もらしい事だと中々人の氣の着かぬ中に其限度を通り過ぎて極端になるものだ。婦人の裝飾や、子どもの教育などには此類の事が頗る多い。「婦人のたしなみ」が通り過ぎて「おしやれ一」になったり、子供を彌が上にも能くしやうとてあれもいけぬ、是も面白くないといろく々な制限を置いたり、或は之を教へるあれも習はして置けて詰り込んで見たりするのは此例であらう。

昨日も電車で遇つた八つ許りの女の子は如何にも上品な美しい顔立で其上に衣服なども立派で見るからに人形の様であつたので同車の人の目を牽いて居つたが其活動は亦意外に少くて本郷から日比谷迄の間母親の膝に腰掛けたまゝ一寸の自動もしないし目も録に働かないので僕は非常に残念に思つた。そして然も得意らしくいやに齊して居た母親の面が憎くなつて来た。折があつたらあー云ふ奴に我自然主義の幼児教育學を講義して遣りたいと思つた。誠に幼児の活動が愛す可きもの美なるものであることを知つて之をして益發展せしめ様など、考へ居る人は未だ少いと見える。(湘南)